NPO法人岡崎まち育てセンター・りた

調査団体名　：　岡崎まち育てセンター・りた
設立年　：　2006（H18）年
団体URL　：　http://www.okazaki-lita.com/
活動拠点　：　岡崎市内各所（乙川、松應寺横丁等）
岡崎市地域交流センター（市内6か所）
取材日　：　2018（H30）年1月16日（「りぶら」にて）

団体代表者名　：　米津 眞 理事長
対応してくれた人の名前　：　天野 裕 事務局長
事務局　：　岡崎市六供町字杉本 78-1
調査員　：　近藤朗、中田慎、服部朋悦、沖章枝、三ツ松由有子
レポート作成者　：　近藤朗

活動内容

岡崎まち育てセンター・りた（以下りた）は、岡崎まちづくり市民公社（1996年設立）、岡崎CDC研究会（市民参加型まちづくりを目指す有志グループ、1999年発足）の流れを汲み、2006年に設立されたNPOである。当時の柴田紘一市長が公約として掲げた「市民協働社会」実現のために設立した公設民営組織であり、岡崎市市民協働の拠点となる地域交流センターの運営受託（指定管理者）、地域自治支援事業、中心市街地再生支援受託事業などを皮切りに様々な活動を展開してきた。
活動の柱は、「市民活動支援」と「まち育て推進」である。スタッフは60名を超え、内50名程が市民活動支援チーム（指定管理業務）に、後はまち育て推進チームが市民と行政の仲介役として、ワークショップなど展開しながら魅力ある岡崎のまちづくりを進めている。活動は多岐にわたるが、その内容を知るための情報発信ツールとして「Litaracy」（隔月発行）がある。

●市民活動支援チーム　・・・岡崎市の地域交流センター5か所の運営と図書館交流プラザ（りぶら）市民活動センター事業を受託し、計6か所の拠点により地区まちづくりを推進している。地域交流センターは、なごみん（北部）、よりなん（南部）、やはぎかん（西部）、むらさきかん（東部）、悠紀の里（六ツ美分館）と旧岡崎市内に配置されている。これらの運営に当たっては市民参加型を基本としている。

●まち育て推進チーム　・・・岡崎市内全域を活動エリアとして、まちづくりフォーラムやセミナー、情報交換の場づくり、その他イベント・まちづくり活動の支援など実に多様な取組をしてきた。その中で新たな展開を迎えたのが、松應寺横丁の空き家活用及び高齢者支援の取組や、現在の内田康宏市長（2012就任 ～）が公約に掲げた「乙川リバーフロント地区整備」（2013年基本方針策定、2014年基本計画発表）に関わった事であり、主にソフト、デザイン面からプロジェクトに命を吹込む役割を果たし、あるいは果たそうとしている。キーワードとなったのが、「新たな公共支援」である。

●これから　おとがわプロジェクトと共に　・・・ 乙川リバーフロント整備を民間・市民主導で進めて行くためのまちづくり手法として「おとがわプロジェクト」が2015（H27）年に開始され、りたがその調整役を担っている。市民も含めた議論・ワークショップを経て、同年「乙川リバーフロント地区まちづくりデザイン基本構想」が策定され、新たな魅力ある公共空間の活用を実現するための社会実験として町中の「めぐるQURUWA（くるわ）」、そして2016年からは乙川河川敷を活かした「**おとがワ！ンダーランド**」を展開、様々な挑戦をしている。

キャッチフレーズ（天野事務局長）

公共空間を使って社会課題を解決する！

・　おとがわプロジェクトなどで実践中、魅力あるまちづくりのための仮説とそれに基づく**「社会実験」**が必要

会のモットー（何を大切にしているか）

市民が中心となって、専門家や行政とも協働してまちをつくる社会を目指す中間支援団体**「まちのミカタ」**である
「**つなぐ**」、「（まちづくりの担い手を）**育てる**」、「**場をつくる**（まちの魅力の共創）」がテーマ

設立から現在に至るまでの変遷・人

● **設立前　・・・** 1999年に発足した有志グループ岡崎CDC研究会に、後に「りた」で主要な役割を果たす三矢勝司（「りた」設立、前事務局長）と天野裕（現事務局長）が参加していた。二人は共に岡崎市出身であり、関東で都市計画、建築を学ぶ仲で、当時の先進的取組事例であった市民参加型「世田谷まちづくり」を目の当たりにしていた。それを踏まえ1999（H11）年に岡崎市での奈良井公園改修に当たり地区住民参加のワークショップを実施し、市公園緑地課に提案したのが最初の岡崎まちづくりへの関わりであり、それに基づき公園計画案が策定（2001年）された。当然の事ながら岡崎市職員とも関わりを持つようになり、現在の礎ともなる。岡崎市役所では、当時熱意のある有志によって「シンクタウン」という学習会があったそうで、彼等とのパイプが後の「りた」にも繋がるという。

● **設立時以降　・・・** 三矢氏は、「りた」設立準備段階（2004年）から関わっており、天野氏は、2007年から「りた」に加入した。三矢氏は現在も「りた」に関わっており、事務局次長を務めている。（今回の取材時も直前まで二人が打ち合わせをされていたのが印象的である。）
なお、「りた」の設立、その後の活動内容については、歴代市長のポリシーともうまくマッチし、三矢氏、及び天野氏の目指す「市民参加のまちづくり」が活かされている。前市長の柴田紘一氏（2000－2012）は、市民協働を公約として掲げ、市内地域交流センターの整備を進めると共に、それを運営するための公設民営組織として「りた」を設立した。次の内田康宏市長（2012－現在）は、乙川リバーフロント整備推進をポリシーとし、「りた」がその協働・共創の主体的な役割を果たすこととなった。
ちなみに、「りた」が設立された2006年の1月には、岡崎市は旧額田町を編入し現在の市域となっている。このことで乙川が岡崎市内で完結する流域となり、額田域の森林も含め岡崎市の地域固有財産となったとも言える。

● **「新しい公共支援、新たな公共の担い手としてのNPO」以降　・・・** 公設民営組織「りた」は、設立後、岡崎市協働の分野業務を様々受託してきた。市民参加は順調に進められてきたものの、「行政が主導する市民参加の限界」を感じていた頃、2009（H21）年の政権交代で「新しい公共支援」という提言がなされた。新たな公共支援の担い手としてのNPOの意義を再認識するものであり、「りた」にとっても一つの転機となった。まず2011（H23）年に取り組んだのが、空洞化が進んでいた岡崎市松本町・松應寺横丁の再生であり、花街として栄えたレトロな魅力を地域資源として活かしながら拠点「松本なかみせ亭」の開設、空き家を活用し新たな店舗の展開などを進めて行った。空き家改修には、愛知県「新しい公共支援事業」が充てられた。また、この地区は「あいちトリエンナーレ2013」の会場にもなった。「地域を元気にするために地域資源を活用する」まちづくりのスタートとなる。
そして、乙川リバーフロント地区整備が始まり、「りた」が市民と共に「新たな公共」の推進者としての役割を担うこととなる。

連携している団体・専門家・自治体など

●当然のことながら岡崎市（各部局職員）、市民・市民団体、まちづくり専門家など多岐にわたる
●額田木の駅プロジェクト 唐沢晋平 事務局長（天野さんは「もっと上流域と連携したい」とのこと）
●橋の下舎 永山愛樹 さんとは、旧知の仲とのこと（「川は僕らの実験場」は二人の共通フレーズです）

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動　社会実験**「おとがワ！ンダーランド」①**

（＊この項目は取材の他、2018年2月5日に開催された「MIZU中部セミナー2018」での天野さんの講演を聞き、収録しています）

乙川リバーフロント地区において、公民連携まちづくりモデルを創ろうというのが「おとがわプロジェクト」。その中で国が進める「かわまちづくり」の一環として、協議会が乙川河川敷を一括して占用できるようになり、営業活動などを含めた様々な試み（実験）が出来るようになった。これが「おとがワ！ンダーランド」であり、2016（H28）年より開始した。
乙川河川敷は春の花見と夏の花火大会だけは大勢の人々がやって来るものの、それ以外は閑散としているとのこと。魅力的な空間を創ることで水辺と人を日常的に繋げ（地域資源を活用し）、岡崎市を中心市街地を元気にする。乙川の上流・額田木材も使いながら流域も繋げる、などの社会実験を展開した。オープンカフェやビアガーデンなど多彩なプログラムを展開、2016年、2017年と実施したが、社会実験であるため昨年度の課題も踏まえ、今年度は、公募期間、開催期間（日数48日→196日）、プログラム内容など大幅に変更しチャレンジしている。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動　課題と新たな実践　社会実験**「おとがワ！ンダーランド」②**

河川利用に関する以下の課題を踏まえて、社会実験・練習としてはこれを打破する新たな試みを展開した。

●せっかく規制緩和したのに使ってくれない ➢ 日常と川との接点をつくる必要があり、誘いとしての「殿橋テラス」を橋のたもと空間に設置し、通行人に立ち止まってもらう。河川敷に気軽に佇んでもらうため、ヒノキ地産材を使った縁台「乙床」を配置し、いずれも心地よい空間づくりを試行した。

●いざ使おうと思っても使いにくい ➢ 「かわまちづくり」で規制緩和されたとは言え、河川利用に関しての条件、ハードルはまだまだ高い。公共空間であり、守らなければならない事は存在する。これから誰もが利用できるように、このルールと手続きをわかりやすく解説したルールブックを編集する。

●使ってもイマイチ盛り上がらない ➢ この場所ならではの使い方を磨いて行く。「乙床」のような日常的な使い方が鍵であり、そのため2017年度は期間を7月20日から1月31日までの長期間を設定した。プログラム数も昨年度より微増の41であるが、イベント的な取組から朝市や星空観望会、乙川リバークリーンなど中継続的に実施される日常的な取組を重視した。

今後やってみたいこと（既にいろいろチャレンジしている最中ではあるが・・・）

同じ岡崎市である乙川上流域（額田地区）との連携をさらに深めたい。

取材者（近藤）あとがき　・・・流域圏の担い手づくりに向けて

今回「りた」取材に私が手を上げたのには理由がある。ここ数年、岡崎市がとても元気である、市職員も活気があると感じていて、私が1997―1998年に愛知県岡崎土木事務所に勤務していた頃と比べて随分と変わってきたように思う。当時乙川には既に噴水、潜水橋（もぐり橋）はあったが、それ以上のアプローチをしようという雰囲気はなかった。岡崎市が活性化した理由の一つは「りた」の存在ではないのか？取材後、確信に変わった。

「おとがワ！ンダーランド」に関しては、規制緩和されたとはいえ、河川管理者である愛知県との協議が重要となるが、天野さんたち「りた」が直接交渉の場に参加することはないという。岡崎市が一元的な窓口となり県との交渉に臨んでいるとのことで、（前例がないような提案が多いのに）これが可能なのは、「りた」と岡崎市が概ね同じ方向を向いているという証である。実は私、この12月24日に「ブラアイチ」という県企画で乙川周辺でのまちづくり・歴史案内イベントを岡崎市職員の方々、まさしく乙川リバーフロントに関わる様々な部署の人たちと共に実施したのであるが、皆前向きで元気だった。乙川に関して市と「りた」との二人三脚は良い効果を生み出していると感じた。また、「おとがワ！ンダーランド」の多様な内容は、行政だけでは決して出来ない内容だろう。

「りたは中間支援団体だから中立性が求められる」と仰っていたが、天野さん、三矢さんは良きコーディネーターであると共に、まちづくりの専門家でもある、かつ若い。このような市民が協働、専門性両方の観点から行政を補完し、強力な推進力となっているのが今の岡崎市の「新しい公共」乙川モデルであろう。

今までの山村担い手調査では、危機感を持った山村に若い人材、よそ者も入り込み、世代も越えて新たな取組を模索している状況を垣間見てきたが、都市域・河川などでは難しいのだろうと思い込んでいた。今年度、山村から流域圏へと調査範囲を広げ、私が出会ったのは、「りた」の他、橋の下世界音楽祭の永山愛樹さん、木かんしゃの庄司知生さん、ちんちゃん亭の鈴木夫妻などで、皆若かった。また天竜川船頭の曽根原宗夫さん、下山の倉知雅博さんなどが真剣な地元戦略を展開されていた。前述「ブラアイチ」で出会った岡崎市職員も皆魅力的で、とりわけまちづくりデザイン課の木下政樹係長は印象深い。彼等から何となく「流域圏の担い手」づくりのイメージが見えてきた気がする。
若者であったり民間人であったり、多様な背景を持つ世代が、既成概念にとらわれない多様な手法と真剣なエネルギーによって地域を創ることが、これからの鍵となる。行政を頼りすぎず、批判ばかりせず、むしろ自分たちが実践し行政を引っ張って行こうという気概を持つことが「新しい担い手」像だろうか。
（これは私が出会った人たちの共通項を並べただけである。）

写真

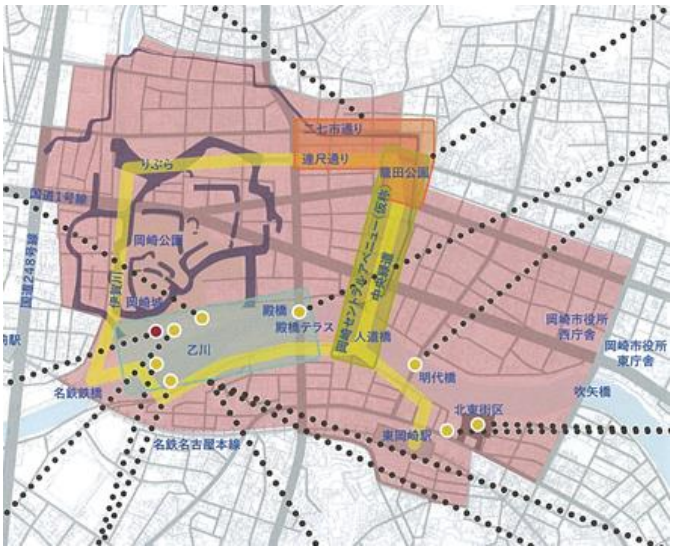
岡崎市「りぶら」にて取材風景　（2018年1月16日）

岡崎市松本町・松應寺横丁の再生　　次は乙川だ！

「ＭＩＺＵ中部セミナー2018in岡崎」で
乙川を語る天野さん（2018年2月5日）

松應寺横丁　なかみせ亭など

写真



Q字の回遊動線をQURUWA（くるわ）として設定
『おとがわプロジェクト中間報告』より

建設の進む将来の人道橋付近の様子
殿橋より乙川上流をのぞむ（2018年1月16日）

額田地域の活性化を目指した「ぬかたのマルシェ」（2017年11月20日、25日の記事より）
おとがワ！ンダーランド（https://www.facebook.com/otogawanderland/）

夜の殿橋テラスと乙川ナイトマーケット（2017年9月23日の記事より）
おとがワ！ンダーランド（https://www.facebook.com/otogawanderland/）